

【第二十三回】「硬筆学習の基礎と発展」

— 学びの指標（硬筆による漢字仮名交じり書） —

静岡大学教授

本誌手本揮毫者

杉崎 哲子

◇はじめに

硬筆力を向上させるためには、毛筆学習と同様に、系統的な学習が鍵になります。

今回は、最近の本誌の「硬筆」段位認定試験課題のうち、四角枠と縦書き罫線入りの用紙への書き方について確認しました。今回は、「行書とそれに調和する仮名を中心に、罫線のない枠のみの用紙に書く課題を見ていきます。

■硬筆における「用」と「美」

硬筆は、学校教育では「硬筆書写」ということとなります。しかし、本誌の段位認定試験の課題は、学校教育における「書写」を基盤にし

ながらも「毛筆書道」に繋がる発展的な学習ができるように設定されています。

硬筆学習は、小学校国語科書写をベースにして漢字の楷書を先に学び、その後、中学校国語科書写の学習内容である行書を学びます。仮名についても、楷書に調和する仮名から始め、その後、行書に調和する仮名を確認し、それぞれの漢字の書体に調和するように仮名を交せて書く段階に進むのが一般的です。

「漢字仮名交じり文」を書く際、最初は縦書き罫線のある用紙に書くと、過度に負担を感じることなく文字の大きさと中心に留意でき、各行を容易におさめることができます。そして、それができたうえで多様な様式へと発展させる流れになっています。

したがって、丁寧な段階を踏まえて取り組むのであれば、四角枠に書く楷書・行書の課題の

後に、仮名についても四角枠に書いて確かめ、それから、縦書き罫線入りの用紙に「楷書と楷書に調和する仮名」だけでなく、「行書と行書に調和する仮名」を書くこととなります。

過去五年間の出題を見ると、平仮名は初段の第3問において平仮名（単体）で言葉を書く（漢字楷書または行書に調和する平仮名）という形で取り扱っているだけで、楷書・行書のそれぞれに調和する平仮名だけを取り立てて書く課題は出されていません。しかし、まずは、楷書・行書それぞれに調和する平仮名（五十音）を一字ずつ丁寧に学習しましょう。

また、縦罫線入りの用紙には「楷書」の漢字仮名交じり書を、枠のみの用紙には「行書」の漢字仮名交じり書を書きますので、縦罫線入り用紙に「漢字行書と調和する仮名」を書く課題と、枠のみの用紙に「漢字楷書と調和する仮名」

扱う内容(書体)	〈書式〉(他の扱い)
漢字(楷書・行書)	〈四角枠〉
平仮名・漢字に調和 (楷書・行書に調和)	取り立てて出題なし (漢字仮名交じりに生かす)
漢字仮名交じり (楷書)	〈縦罫線あり〉 二〜七段・第3問
(行書)	出題なし (書式/便箋)
漢字仮名交じり (楷書)	〈枠のみ〉
(行書)	出題なし(ポスター) 二〜七段・第4問 (七段は横置き)

を書く課題は省略されています。実は、これらは他の課題で審査されるのです。

左の表を見ると分かる通り、罫線入り用紙に行書を書く課題は、日常的には、便箋に書く時に生き、本誌の試験では七段と八段の第6問の課題になっています。また、枠のみの用紙に楷書(漢字仮名交じり書)を書く課題は、日常的にはポスターや案内状に生かせるもので、試験では、五段の第6問(書式/楷書)や、書体は自由ながら、やはり書式のはがきの表書きや裏書きなどに汎用できる内容です。出題の意図を意識して取り組まれるとよいでしょう。

ところで、行書学習についてですが、中学校国語科書写では、「読みやすく速く書く」ことを目的に展開されます。しかし便箋に手紙を書いたり案内状を書いたりする時には、書く速さは要求されず、ゆっくり丁寧に書きますし、楷書で書くこともあり(現代の若い人は、速書きでも楷書で書くのが一般的で、行書を日常的に使いこなす方が稀かもしれません)。

また、日常生活において、枠のみの用紙に俳句や短歌を書くことの必然性は、「正しく整えて(速く)」という「用」の追求だけでは言及し尽くせない、「美」の領域になります。

本誌の硬筆では、「美」の側面にも意識を向けていますので、「線質」が重要視され、仮名古筆の散らし書きに倣って構成上でも美しく見せることを追求する学習が生きるのです。

そこで、硬筆の力を向上させるには、漢字では整齊さを基盤にした毛筆学習が有効であり、仮名に関しては、硬筆を毛筆の「骨書き」として捉えて取り組むこともできます。

硬筆だけを学びたい場合でも、硬筆に限定して取り組むのではなく、毛筆学習を通して、硬筆力を高められるとよいでしょう。

■枠のみの用紙におさめる課題について

過去五年間の出題に共通して、二段と三段の第4問に、「漢字行書と調和する仮名」をおさめる課題が出ています。俳句が題材に挙げられ、月例の硬筆課題の「高・大・一般用の枠なしの

用紙」を縦に使用することになっています。

四段になると、用紙についての指示は同様ですが、題材が短歌になっているので、当然ながら、文字数の増加に伴って全体に文字を小さく書かなければなりません。

五段でも四段と同様に短歌を題材にしていますが、縦使用という指示がないので、横置きに使用するという選択肢も考えられます。ただし、六段の第4問は、「縦使用」とあり、七段の第4問では「横使用」の指示が加えられています。出題内容をよく確認して取り組みましょう。

ここで、枠のみの用紙に書く時の留意点を審査講評の指摘事項から見えていきましょう。

◇「漢字行書と調和する仮名」という出題では、本文も落款も行書で書きましょう。

段位に限らず、「漢字行書と書いてあるのに、落款の『書』が草書になっている」という点、毎回のよう指摘されています。本文の漢字を草書にして減点されることもあります(出題が草書になるのは七段以上です)。

◇課題語句(俳句や短歌)のおどり字や仮名遣いをしっかりと確認して書きましょう。

落款の書体の次に多いのが誤字や脱字に関する指摘です。特におどり字や旧仮名遣いを書き間違えることがあるようです。例えば、「にほひ」を「にほい」、「た、ずみて」を「たたずみ

て」と書くとは減点対象になります。

◇落款も含めて、散らし方（大きさ、位置、行脈）を学習しましょう。

枠のみの用紙に書く課題では、「散らしの行脈が不自然」「散らし方が未熟」ということが、評価に大きく影響します。また、「落款の位置・大きさが本文との調和を欠いている」場合や、「落款を出題文の通りの位置に書いて、紙面全体に対して不調和になっている」ことによる減点も見られます。時には、「落款がない」ために、残念な結果になる方もおられるようです。

加藤東陽先生は、落款について、次のように言及されています。

「…落款については、生涯の課題といっても過言ではありません。普段から作品との調和を考え、大きさや位置関係など、他人の作品をも参考にして、研究するよう心掛けてください。」

■枠のみの用紙における散らし方

それでは、どのように散らせばよいのかというと、この問いに対する正解が決まっているわけではなく、題材によって臨機応変に対応しなければなりません。

ここでは、枠のみの用紙に漢字（行書）をおさめる際の手順を丁寧^{ていねい}に追いながら、過去の優

秀作品を例に、「散らし方」を考えていくことにします。

①課題（俳句、短歌）の確認

まず、課題になっている俳句や短歌について、脱字や誤字、仮名遣いを誤ることのないようにしっかりと確認します。

②行書と行書に調和する仮名の確認

次に、漢字の部分を行書ではどのように書くか、書道辞典を活用するなどして確かめます。転折が曲線的になったり、筆順の変化や点画の省略が生じたり、筆脈が実線化したり、直接連続したりするなどの「行書」の特徴を捉えることが重要です。仮名についても、行書に調和するように十分気をつけて、別紙に一行で、書いてみるとよいでしょう。この時、無理のない範囲であれば、連綿^{れんめん}を加えてもよいのですが、背伸びは禁物です。

③散らし方を考える

一行書きしたものを、まずは、言葉のまとまりで切り取り、並べてみます。

◇行頭を揃えて書く。

各行の高さを変えない（行頭揃え）でもよいのですが、紙面の下方が空き過ぎてしまうと減点されますので、注意しましょう。

◇行間を等しくし高さ（行頭の位置）を変える。

Aは、本文を三行に分け、行の中心を垂直^{すいちよく}

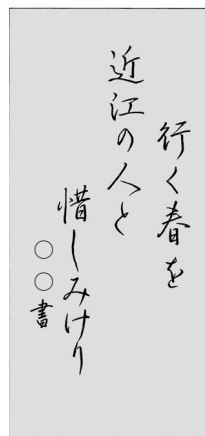
に貫き、また、行間を等しく配して行頭の高さを変えています。全体に大きめに書きながらも左右の余白が効き、本文の字形や線質、落款の大きさや位置も申し分ありません。

◇行間に変化を加える。

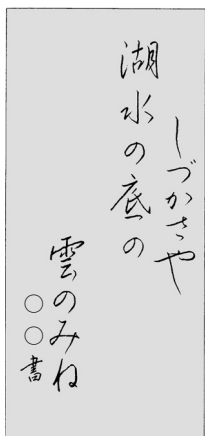
BとCは、一・二行目の長さに違いはありますが、二行のまとまりと一行プラス落款という同じような配置になっています。

ただ、Bは、広く空けた行間の「白」に押し、右の余白も狭いので、一行目が窮屈です。その点でCは、右の余白は効いていますが、左の余白が少し狭いようです。

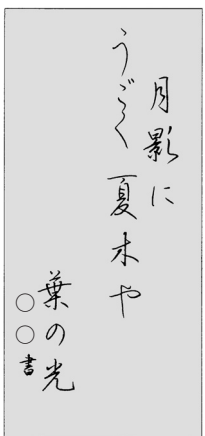
またDは、一行目の後の行間を広くし、二行



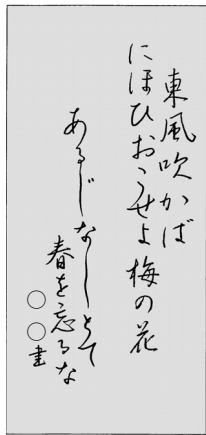
A = 二段優秀作品



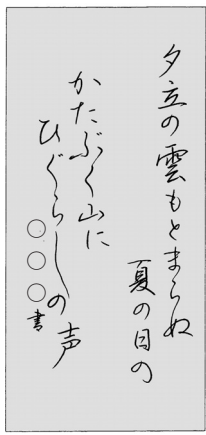
B = 二段優秀作品



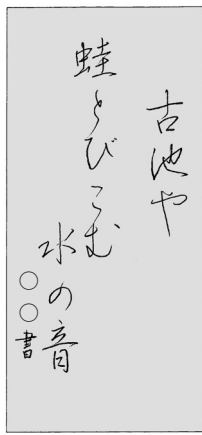
C = 三段優秀作品



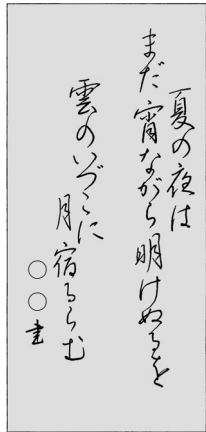
F = 五段優秀作品



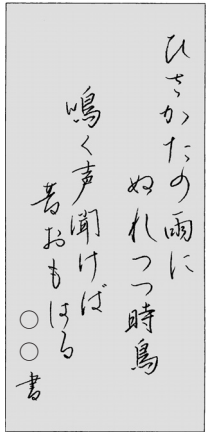
E = 四段優秀作品



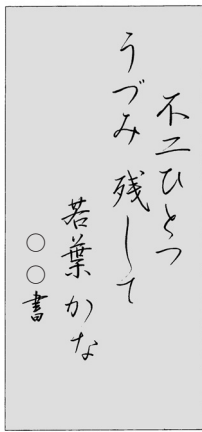
D = 二段優秀作品



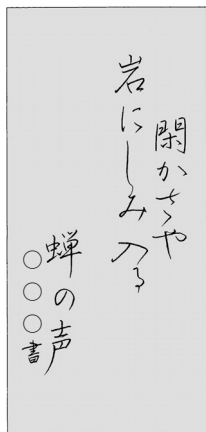
I = 五段優秀作品



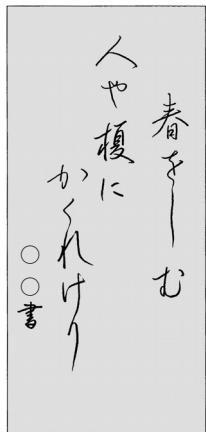
H = 四段優秀作品



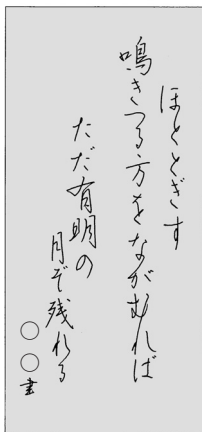
G = 三段優秀作品



L = 三段優秀作品



K = 二段優秀作品



J = 四段優秀作品

プラス落款をひとまとまりにしています。全体に文字が大きく、特に左の余白が狭いので、行が外に逃げて見えます。

◇行を揺らす（落款も含めて考える）。

Eは、三・四行を揺らしています。各文字が上手ということもあり、許される範囲ではありますが、揺れた行の後の落款が垂直なので幾分不自然に感じられます。

◇大きさ、文字の中心に注意する。

Fは、字形は良いのに、「お」の中心がずれ、三行目の「な」が極端に小さくなっています。散らし方を考える際に文字の大きさと中心を確

認されるよう、強調しておきます。

Gは、三行目の漢字が小さくなってしまいました。大きさの問題だけでも不自然な印象になるので、注意しましょう。

Hは、自然に行を流していますが、左右の余白も少なく全体に大きいのが気になります。

Iは、「明けぬるを」で右下に流しているのに、落款の「書」が名前の二文字よりも左に流れているので仮名古筆に見られるような下方での収斂が感じられません。

◆落款の位置に注意する。

再度、落款を見ていきましょう。HとJは、

落款の位置の低いところが改善点です。

■線質と古筆の生かし方

Kの作品は、文字はやや大きいですが、線が澄んで上品にまとめられています。それに対して、Lは、筆記具のせいか硬い感じがしています。「線質の美」という点にも留意しましょう。

上位の段位の横置きや、短冊、色紙に書く課題では、仮名古筆の散らし方を参考にする方法をお勧めします。古筆を鑑賞し、「散らし書き」の力をつけてください。